

社会相対説

倫理学の主な立場

利己主義	自分の利益を最優先する 自分の幸福と快楽がなにより大事 それ以外は考えない
相対主義 主観主義	なにが正しいかは社会によってさまざま なにが正しいかは人それぞれ
帰結主義 功利主義	結果として皆が幸せになることを めざす。
非帰結主義 義務論・規則主義 カント主義	結果より、正しく定められたルールが大事。 いろんな種類がある
徳倫理学 アリストテレス主義	ルールや個別の行為ではなく、 人の性格や美徳が大事
無道徳主義 ニヒリズム	道徳なんて気にしない

復習

- ・ よく生きたい。(ソクラテス「ただ生きることではなく、よく生きることが問題なのだ」)
- ・ 人は悩む。どう行動すればいいのか、どういう人生を歩めばいいのか。etc.。毎日「選択」のくりかえし。
- ・ 我々是对立する。どういう社会制度が正しいのか。
- ・ どう考えるのがよい考え方か。

スカーレットの浮気

- ・ 人妻スカーレットは、憧れのブラッド・デップと一晩してよいか。

(復習)

賛否の「理由」をいろいろ考える

- ・ 悩む場面、意見の対立がある場面には、さまざまな賛否の理由がある。
- ・ フランクリンの方法：まずは賛否両論の理由をリストアップ。賛否のバランスを考慮しながら消していく。

様々な理由

- ・ 帰結に訴えるものか（帰結主義的発想）
- ・ ルール（権利・義務）に訴えるもの（義務論的発想）
- ・ 人の性格、美徳、理想に訴えるもの（徳倫理的発想）（人格主義、人品主義、品位主義、性格主義）
 - ・ 他にもあるかもしれない。

正解は？

- ・ 一人で、自分だけにかかわることを考える場合はそれでそこそこうまくいくかもしれないが……
- ・ その答えが正しいかどうかよくわからない。フランクリンの「道徳的計算」を明日やると今日とは違った結果が出ないか？
- ・ 他の人が関わる問題、グループの問題、社会の問題など、複数の人々で同意しなければならないときどうする？

当然湧いてくる発想

- ・ (1) 「正しい答え」はあるんかいな？社会によって、人によって、答えはちがうんちゃうか。
- ・ (2) もし「正しい答え」があるとしても、その正しい行動をする必要なんかあるんかいな。そもそも、みんな見つからなきゃ正しいことなんか選ばず、「悪いこと」するんちゃうかいな。

道徳・倫理学について よくある誤解

- ・ 「道徳や価値観は国や宗教や時代によって違うのだから「本当に正しいこと」など存在しない」
 - ・ → 文化相対説
- ・ 「道徳観・価値観は人によって違うのだから、「本当に正しいこと」など存在しない。」
 - ・ → 主観説

浮気・不倫の代償

- ・ 名誉殺人：世界各地。婚外性交渉、婚前性交渉、同性愛、私生児の妊娠、家族の同意のない結婚などを理由にした私刑（リンチ）。イスラム、ヒンドゥーなどに多いが、西洋でも以前は行われていた。
- ・ イスラムのジナ：婚外性行為、婚前性行為に対する罰。石打で死刑、鞭打ち100回など。

聖書 「申命記」

22:13 「人が妻をめとり、彼女のところに入った後にこれを嫌い、虚偽の非難をして、「……処女の証拠がなかった」というならば、その娘の両親は街の門にいる長老たちに差し出し、……証言しなければならない。……男を捕まえて鞭でうち……銀100シュケルの罰金を科し、それを娘の父親に渡さねばならない」

聖書 「申命記」

「しかし、もしその娘に処女の証拠がなかったという非難が確かであるならば、娘の父親の家の戸口に引き出し、町の人たちは彼女を石で打ち殺さねばならない。」

聖書 「申命記」

「男が人妻と寝ているところを見つけられたならば、女と寝たその男もその女も共に殺して、イスラエルの中から悪を取り除かねばならない。」（申命記22:22）

聖書 「申命記」

「ある男と婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を共にしたならば、その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺さねばならない。その娘は町の中で助けを求めず、男は隣人の妻を恥しめたからである。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。」（申命記22:23-24）

聖書 「申命記」

「ある男が別の男と婚約している娘と野で出会い、これを力づくで犯し共に寝た場合は、共に寝た男だけを殺さねばならない。その娘には何もしてはならない。娘には死刑に当たる罪はない。」（申命記22:25-26）

聖書 「申命記」

「ある男が婚約していない処女の娘に出会い、これを捕え、共に寝たところを見つげられたならば、共に寝た男はその娘の父親に銀50シュケルを支払って、彼女をその妻としなければならない。彼女を辱めたのであるから、生涯彼女を離縁することはできない。」

性道徳は様々？

- ・ 一方で客人に妻を提供することが義務、あるいは善行であるとする文化もある。19世紀のエスキモーには、客へのもてなしとして自分の妻を提供する慣習があった。
- ・ 売買春が不道徳であるとして禁じられている地域もあれば、合法も地域もあり、また高級売春婦（クルティザン）が賞賛される文化もある。
- ・ 姦通がロマンチックなものとされる文化も多い。
- ・ フランスでは女性が婚外で愛人をもつのは当然と考えられている。

相対主義

- ・ 相対的 = なにか他のものに関連・依存する。 ⇔ 絶対的
- ・ 倫理学における相対主義：道徳的な規範や価値は社会や人々のグループの文化に相対的である。文化相対主義
- ・ 「その人（の感じ方）に相対的である」という考え方は、特に主観主義とよばれる

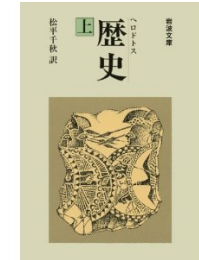
ヘロドトス

- ヘロドトス（紀元前5世紀）
- 諸国を訪問して最古の歴史書『歴史』を書く。



ヘロドトス『歴史』

どこの国の人間でも、世界中の慣習の中から最も良いものを選べといえ、熟慮の末誰もが自国の慣習を選ぶにちがいない。このようにどこの国の人間でも、自国の慣習を格段にすぐれたものとするのである。……どこの国の人間でも、慣習についてこのように考えていることは、いろいろな証拠によって推論することができるが、中でも次に記すことはそのよい例といえよう。



（ペルシャ王）ダレイオスがその治世中、側近のギリシア人を呼んで、どれほどの金を貰ったら、死んだ父親の肉を食う気になるか、と尋ねたことがあった。ギリシア人は、どれほどの金を貰っても、そのようなことはせぬと言った。するとダレイオスは、今度はカッラティア人と呼ばれ両親の肉を食う習慣を持つインドの部族を呼び、先のギリシア人を立ち会わせ、通訳を通じて彼らにも対話の内容が理解できるようにしておいて、どれほどの金を貰えば死んだ父親を火葬にすることを承知するか、とそのインド人に訊ねた。

するとカッラティア人たちは大声をあげて、王に口を慎しんで貰いたいといった。慣習の力はこのようなもので、私にはピンダロスが「慣習こそ万象の王」と歌ったのは正しいと思われる。

古代ギリシアのソフィストたち

- アテネなどは民主制 → 弁論が重要。
- 弁論を教える教師が現れる。ソフィスト（知者）

ソフィストの主張

- 認識についての相対主義。
- 暑さ、寒さの感じ方は人によって異なる。
- プロタゴラス「人間は万物の尺度である」

ソフィストの主張

- 倫理・道德の問題も相対的。
- ピュシス（自然）とノモス（法・習俗・道德）の対立。
- ピュシスは世界を支配する法則。ノモスは人間集団によって恣意的に決まっている。

ソフィストの主張

- したがって、我々はノモス（法、慣習）をそれほど尊重する必要はない。
- うまく不正なことをできるときにはそうしてもかまわない／むしろ不正なことを上手に行なうべきだ。

パスカル

- ・ ブレーズ・パスカル(1623-1662)。フランスの哲学者・数学者・物理学者。『パンセ』が有名。
- ・ 「人間は考える葦である」「クレオパトラの鼻がもっと低かったら、大地の全表面は変わっていただろう」



パスカル『パンセ』

「正義。流行が好みを作るように、また正義をも作る。われわれが見る正義や不正などで、土地が変わるにつれてその性質が変わらないようなものは、何もない。緯度の三度のちがいが、すべての法律をくつがえし、子午線一つが真理を決定する。数年の領有のうちに、基本的な法律が変わる。川一つで仕切られる滑稽な正義よ。ピレネー山脈のこちら側での真理が、あちら側では誤謬である。」

20世紀の相対主義

- ・ 20世紀前半の文化人類学の発展。西洋以外の価値観の「発見」。文化の多様性が強調される。
 - ・ ブロニスワフ・マリノフスキー（『未開人の性生活』）
 - ・ ルース・ベネディクト（『菊と刀』）
 - ・ マーガレット・ミード（『サモアの思春期』）

ルース・ベネディクト

- ・ 「手短かに言って、正常・異常は、文化的に規定されたものである。」
- ・ 「われわれはもう、人間の本性の避けがたいなりたちから、われわれの地域や時代の道徳が成り立っているのだなどとまちがわないようにしよう。われわれの道徳を、なんらかの第一原理の尊厳をもつものとかんがえるのをやめよう。」



Ruth Benedict
(1887-1948)

- ・ 「われわれは、それぞれの社会で道徳が異なること、そして「道徳」とは社会的に是認されている慣習をさす便利な言葉であることを認めなければならない。人類はいつも、「それは慣習だ」というかわりに「それは道徳的によい」と言う方を好んできた。しかし歴史的には、この二つのフレーズは同義なのだ。「正常なもの」という概念は、「よいもの」という概念のバリエーションである。それは、その社会が是認するもののだ」
Ruth Benedict, “Anthropology and the Abnormal”



相対主義の主張

- ・ 道徳規範は社会によって異なる。
- ・ ある社会の道徳規範は、その社会においてなにが正しいかを決定する。ある一つの社会の道徳規範があるふるまいを正しいとするならば、その行動は、すくなくともその社会において正しい。
- ・ （したがって）一つの社会規範が別の社会規範より優れていると判断できる客観的基準はない。

- ・ 我々の社会の道徳規範は特別な地位を持つものではない。それは数多くある道徳規範のうちの一つにすぎない。
- ・ 他の(文化の)人びとの行為を判断しようとするのはまったくの傲慢である。他の文化のひとびとが行なうことに対してわれわれは寛容な態度をとるべきである。（「規範的相対主義」）
- ・ 倫理に「普遍的真理」などは存在しない。つまり、いつの時代にも、またすべての人びとにあてはまるような道徳に関する真理は存在しない。（「ニヒリズム」）

相対主義の魅力

- ・ 文化によって慣習が違うという事実は明白。
- ・ 各社会の慣習や古い法は、その社会の様々な課題に対するスマートな解答かもしれない。
 - ・ 気候、希少資源、安全、人間関係……

- どの文化が「より進んで」いるかを判断するのは難しい。
- 歴史的な教訓からすれば、他文化の社会慣習に干渉することには慎重になるべきである。
- 他の文化に対しては寛容であるべき、他の社会に対する軽蔑を表わすことに慎重であるべきという信念は（現在では）広く受けいれられている。
- 常に他の人々の価値観と批判とに対して開かれた心をもちつづけるべき。

- われわれの好みになにか絶対的な合理的基準にもとづくと仮定することは危険。

相対主義への反論(1)

- 文化による道徳的規範の違いは見かけだけかもしれない。

- 文化による道徳的規範の違いは見かけだけかもしれない。「人々はお互いにもてなしかうべきだ」「互いの利益を尊重すべきだ」のような根本的な原理は同一かもしれない

(1) 基本的な原則も違うか？

- 文化による道徳的規範の違いは見かけだけかもしれない。「人々はお互いにもてなしあうべきだ」「互いの利益を尊重するべきだ」のような根本的な原理は同一かもしれない

- 冒頭のダレイオス王の逸話でのギリシア人もインド人も、「親の遺体は**丁重**に扱わねばならないか？」とたずねられたら「当然イエス」と答えそうである。
- → 「親は大事にするべき」という基本的な原則は同じだが、「**丁寧**に扱う」という目的のための手段についての考え方が違うだけかもしれない
- たとえば、遺体を食べてもらうことによって、子孫が続く限り永遠に生きていることになると思える文化がある
- 親の遺体は丁寧に + **遺体の一部を食べるのが丁寧**
→ 親の遺体は食べるべき

(2) 他文化を批判すべきでないか？

- もし文化相対主義が正しいければ、われわれは他の社会の習慣や社会規範がわれわれの習慣や社会規範より道徳的に劣っているとは言えることができる。
- しかしわれわれは他の文化的慣習には口出しできないのか？ その文化の内部で正しいと思われていたらそれは実際に正しいのか？

反論(2) 文化だから許される？

- 奴隷制度、人種差別
- 纏足
- インドのサティー（寡婦殉死）
- FGM（女性器切除）
- 死刑

纏足

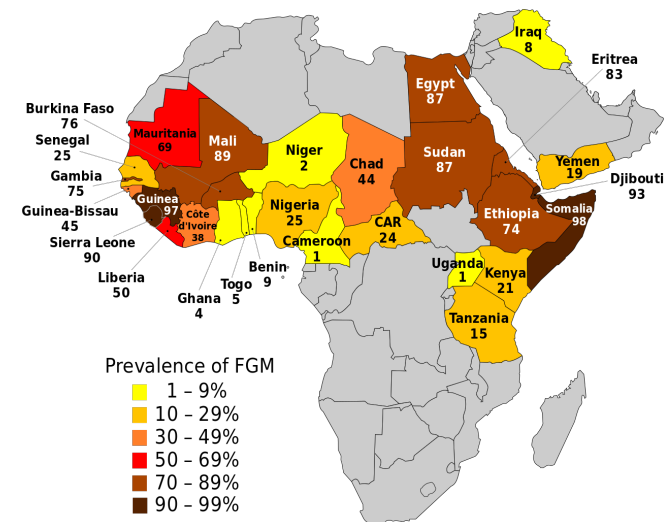


FGM

- ・クリトリスの一部または全部の切除。
- ・クリトリス切除と小陰唇の一部または全部の切除。
- ・外性器（クリトリス、小陰唇、大陰唇）の一部または全部の切除および膣の入り口の縫合による膣口の狭小化または封鎖。



2015年のFGM実施率



- たしかにFGM（女性器切除）のような慣習を他の文化圏の人間が批判することには慎重であるべきかもしれない
- しかし、どのような文化の慣習も、その文化に属している人びとが正しいと考えているのなら実際に正しく、他の文化に属する人びとは一切の批判を行なうべきではない、とまでは言えない

- 世界観や信念が、正しい事実に近づけば文化間の意見の違いも縮まる？
- （例）FGMはイスラームの神が命じていると思っていたFGM施術師（実はコーランはそれは命じていないらしい）

反論(3)

普遍的な価値や原理があるのでは？

- 生命、自由、愛、家族関係、健康、教育、財産、遊びなどはどの文化にも共通する人間の価値ではないか？
- 黄金律「あなたがしてほしいように他の人にせよ」「あなたがしてほしいことは他のひとにするな」
- 基本的な原理・原則はほぼ共通だが、その原則を実現する方法が、社会的な条件や世界観によって異なるだけ？

反論(4) 歴史的進歩

- 相対主義が正しければ、「道徳的進歩」などといったものは存在しないことになる。
- たとえば、江戸時代や明治時代には、女性は男性よりも本質的に劣ったものとされていたと言われる。現在わたしたちの多くは男女が平等な社会的権利を持てる社会を目指している。
- しかし、もし文化相対主義が正しければ、江戸時代の考え方も現代の考え方もどちらも同じ価値ということになってしまうのではないか？
- （例）奴隷制の廃止。人種による違いはほぼない、ということが理解されるにしたがって奴隷制は不正であると考えた人が増えた。

(5) 内部からの批判は どう扱う？

- ・もし文化相対主義が正しければ、われわれが生きている現在の社会を内部から批判することもできなくなる。
- ・しかし「道德の基準は社会が決めている」という相対主義が正しければ、ある文化の内部でその文化を批判する人々は、常に間違っているということになってしまう。
- ・これまでも、社会の道德的な側面は、革新的な個人が社会を批判することによってなしとげられてきた。女性には教育は必要ないと思われていた時代に女子教育をめざした人びと、奴隷制度の廃止などの改善がなされたのは、そういう慣習を批判する人びとがいたからである。

反論(5)

「社会」「文化」を特定できるか？

- ・そもそも「文化」や「社会」というものがはっきりした境界をもって存在しているかどうかは怪しい。
- ・「現代日本の文化」とひとくくりにされることが多いが、関西だの京都だの若者だの中年だの学者だの学生だの、さまざまな属性を持つ人々の寄せあつめでしかなく、その個々の集団によって考え方のパターンは違っている。

反論(6)

意見の対立が存在しないことになる？

- ・道德的・倫理的な意見の対立はひとつの「社会」のなかにも常に存在している
- ・単なる「慣習」はたしかに社会的なものだろうが、道德的な意見は単なる社会的なものではない

相対主義の問題

まとめ

- ・他の文化に対する批判や、道德的進歩が不可能だとは考えにくい
- ・社会内部での意見の対立や慣習の批判が原理的に不可能とは考えにくい
- ・参照される「文化」の範囲が不明

結論

- 道徳感覚が社会によって異なっているのは明らかだが、共通の基盤がないとは言いきれない
- マナーやエチケットにあたるものと、もっと重要なものを区別すべき
- 相対主義はけっきょくは「道徳観は（社会ではなく）人によって違う」とする主観主義におちいる（そして主観主義はかなり魅力的な立場）